

命を銜んで本国に使う（阿倍仲麻呂）

命を銜んで 将に 国を 辞せんとす

非才 侍臣を 恭うす

天中 明主を 恋い

海外 慈親を 懐う

伏奏して 金闕を 違り

駢驂 玉津を 去る

蓬萊 郷路 遠く

若木 故園の 鄰

西望 恩を 懐うの 日

東帰 義に 感ずる 辰

平生 一 宝劍

留めて 贈る 交を 結ぶ 人に

銜命将辞国 非才恭侍臣  
天中恋明主 海外懷慈親  
伏奏違金闕 駢驂去玉津  
蓬萊郷路遠 若木故園鄰  
西望懷恩日 東帰感義辰  
平生一宝劍 留贈結交人

解説 阿倍仲麻呂が帰国について述べた詩。

語釈 ※銜命 皇帝陛下の命令。※非才 才能がないこと。※天中 天下。※慈親 慈悲深い親。※金闕 駢驂 馬車。※玉津 立派な港。※蓬萊 日本のこと。※若木 未熟な若木のような日本。※東帰 東の日本に帰る。※平生 平素から。

通釈 皇帝の命令を受けて今から唐を出て行くこととしている。私は才能に欠けていたが皇帝の傍に仕える役を仰せつかった。この皇帝は天下から明主として慕われ、海外からも慈悲深い親のように懐かれている。この皇帝に伏してお願ひしてやっと宮殿を出る許しを得た。四頭立ての馬車で出て行き、立派な港から旅立つ。日本へ帰る路は遠いが、日本（未熟国を若木にたとえる）は唐（成熟国を古い庭園にたとえる）の隣にある。西を望んでは唐で受けた恩を思う日があるうし、東に帰っては唐で受けた義を感ずる時もある。私が平素から宝としてきた劍を親しく交わった友に留め贈りたい。